みんなの
ための
学校長会に

茨城県 学校長会広報

第254号
発行者
茨城県学校長会
会長　内田　和子
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933-1
教育プラザいばらき内
☎ 029－269－1300
FAX 029－269－1304

特集　特色ある学校経営
行財政・調査研究委員会の要望や取組

地域とともにある学校づくり

北茨城・石岡小
黒澤　祐一

本校は、地域との連携を大切にして、児童の主体性を育む教育活動を進めています。総合的な学習の時間「レッツチャレンジ米作り」は、田植え、稲刈り、脱穀等を地域の協力のもと取り組んでいます。全校集会の「石岡小まつり」では、これらの体験について発表し、地域の方へ感謝を伝えます。また、漁業協同組合の方々の指導により、学区にある大北川の生き物の観察や清掃活動も行っています。地域の大きな力に支えられ、充実した体験学習を継続しています。

目次

○表紙写真に寄せて……1
○（特集１）特色ある学校経営……2
○（特集２）行財政・調査研究委員会の要望や取組……6
○特別寄稿「子供たちが、今も未来も幸せになれる学校を」……7
○経営研究「創意工夫を生かした特色ある教育課程」……8
○課題「コミュニティ・スクール≒学校の応援団」……10
○市町村教育委員会と学校長会……11
○梅のかおり……12
○図書案内……14
○ひばり……15

特色ある学校経営

特集 1

児童も教師もいきいきと『花と本と絵のある学校』づくり

那珂郡・中丸小　田村　寿俊

本校は、児童数六五一名、今年度創立七五周年を迎えた中規模校である。キャッチフレーズ『花と本と絵のある学校』を掲げ、児童も教師もいきいきと学校生活を送り、心豊かで創造性に富んだ児童の育成のため日々尽力している。

一　『花と本と絵のある学校』

豊かな心や創造性の涵養を目指して、キャッチフレーズにある三つの情操教育に全校をあげて取り組んでいる。植物、文化、芸術に触れ合い、様々な経験の中から自分の感性を磨き、自分の思いや考えを基に表現する力を育む。そして、他人のことを思いやる心と未来を拓く新たな価値を創造する力を育んでいく。

㈠花のある学校づくり

正門前、校舎前、昇降口前など子供たちの目には、常に花が飛び込んでくる。花は、たて割り班活動の中で全校児童で種植えから行いプランターや花壇に植栽し、草花委員会でその世話をしている。子供たちは毎朝、きれいな花に迎えられて登校している。植替えは春秋の年に二回行い、六年間自分たちが育てた花を見て生活することで、自然と愛情や愛着、生き物を思いやる心が湧くものである。

・児童、保護者、教員、地域が連携して取り組む花壇づくり
・「花いっぱい運動」の推進
・学年花壇の整備
・ボランティアの方による生け花の展覧とクラブ活動

㈡本に親しむ学校づくり

学校図書館を核とした読書活動を推進している。朝読書や休み時間の読書活動、スクールボランティアによる読み聞かせ（朝、昼）により、本を読み、親しむ時間を大切にしている。

また、村職として学校図書館指導員が常駐しており、図書室の管理運営を行っている。子供たちが本に興味をもち読む機会が増えるような図書室の環境づくり、学校図書館だよりの工夫、その他読書に関わる様々な施策を行っている。本から言葉を学び、感性を磨き、表現力を高めることをとおして、豊かな創造力を育んでいる。

・推薦本のポップづくり
・読書感想画、読書推薦文、辞書引き大会の開催
・学校図書館指導員の授業参加
・図書館活用プログラム（読書コース、調べ学習コース、美術コース）の実施
・百人一首大会の開催

年に二回開催しており、二四回目を迎えた。フリー参加で一～六年生まで楽しみながら古典に親しんでいる。

㈢絵が身近にある学校づくり

潤いのある学習環境の整備に向けた「絵のある学校づくり」を推進している。校内廊下壁面に、児童の絵画作品や名画を展示するコーナー「なかまるギャラリー」の設置、校内を彩る壁画づくり（卒業記念作品）、村生涯学習課と連携した絵画巡回展の実施などにより、多くの作品に触れ鑑賞できる環境とすることで、感性を育み、ものの見方や感じ方を深め、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を育んでいる。

・地域コミュニティセンターと連携した絵画作品展示
・村特別指導員の専門的な授業

二　コミュニティ・スクールを生かして

今後の見通しとしては、コロナ禍となり活動が滞っていた学校運営協議会との連携を再始動し、学校と地域が一体となって子供たちの育ちを支えていく。様々な学校行事への関わりを広げ、読み聞かせボランティアの募集や「なかまるギャラリー」への作品展示の依頼、外部指導者や花壇管理の協力を集う。様々な場面において協議会委員には一緒に学校を見て回る機会を設け、価値や課題を共有し、同じ見方や考え方のもとで共に活動できるようにしていきたいと考えている。

三　おわりに

子供たちが未来を心豊かにいきいきと生きていくために、情操教育は大切である。学校は日々の生活の中から、それを意図的かつ自然に育んでいきたい。

子供たちは保護者の宝であり、地域の宝である。その子供たちを預かり関わり教育していく私たち教員には大きな期待が寄せられている。その期待に応えるためにまず教員が仲良くいきいきと働いていることが大切である。

たて割り班活動「花いっぱい運動」

幼小中が連携し地域とともにある学校づくり

高萩・松岡中　多田　典子

本校は、高萩市の北部に位置する、生徒数一八〇名、学級数八学級（内特別支援学級二学級）の学校である。学校の周囲には田畑が広がり、東には太平洋を臨む自然豊かな環境にある。本校と松岡小学校は同一学区であり、さらに松岡幼稚園も近隣に位置しているため、地域や幼小中交流のための環境にも恵まれている。この教育環境を生かし、地域に根ざした教育活動を推進している。

一　幼小中ふれあい活動の推進

松岡地区の幼稚園、小学校、中学校では、連携を深め、発達段階に応じて交流活動を行うことにより、園児、児童、生徒の郷土愛と誇りを育んでいる。

㈠年中行事におけるふれあい交流

本校では、季節ごとに松岡幼稚園と交流をもち、学校田の田植え、稲刈り、収穫した餅米での餅つき、凧あげ、豆まきなど日本の伝統行事を合同で行っている。本校生徒の中には、自身が園児のとき、中学生に遊んでもらった経験をもつ生徒も多くおり、行事とともに心の交流も地域の伝統となっている。

㈡幼小中合同あいさつ運動

松岡中学校・松岡小学校・松岡幼稚園、三校（園）合同で年に二回さわやかマナーアップ運動を実施している。生徒会役員や生活委員会の生徒が、高萩市教育委員会のキャラクター「萩太郎」の着ぐるみを着て、登校する児童・生徒にあいさつし、活気と笑顔あふれる取組となっている。

二　郷土教育の推進

㈠「高萩学」の推進

「高萩で学ぶ・高萩を学ぶ・高萩のために学ぶ」を学習テーマに、高萩の偉人、産業、友好都市等について、総合的な学習の時間において「高萩学」の学習を実施している。小中学校九年間のカリキュラムが組まれ、発達段階に応じて計画的に学習を進めている。生徒は、学区にある「松岡八景」といわれる場所に実際に足を運び、地域の歴史や風情を感じたり、また、江戸時代の地理学者・長久保赤水が作った日本の古地図史上重要とされる「赤水図」について学び、松岡の偉人の功績に思いをはせたりと、学習を通して地域のよさを身近に感じ取ることができる。郷土を愛し、進んで高萩のよさを学び、夢に向かって行動しようとする姿勢が育ってきている。

㈡米づくり体験

松岡地区は、山からのきれいな水が集まる地域で、米づくりに適した土地とされている。本校では、毎年、一年生が米づくり体験をする。米づくりを通して、作物を育てる難しさを知り、根気強く取り組む態度を育て、収穫の喜びを味わい、自然の恵みに感謝する心を育てている。

㈢自然環境の保護活動

本校では、「文化の里松岡」の自然環境の保護の一環として、生徒会による「たつごの里クリーンプロジェクト」を計画し、清掃活動を実施している。これにより、松岡地区の美しい自然を守る意識が高まっている。

「赤水図」を用いた「高萩学」の授業

㈣地域産業への理解促進

高萩市ロータリークラブの協力で、松岡地区出身で地元の会社・事業所で働く方々に話を聞く機会を設けている。郷土の産業と職業人としての働き方を理解することで、郷土に対する誇りと愛着を育んでいる。

㈤地域イベントへの参加

「松岡中ソーラン踊り隊」は、毎年、有志を募り、おやじの会の方々の指導の下で練習を行い、市民祭り等において演舞を披露している。ソーラン隊の元気な声を響かせ、地域への協力・貢献をしている。生徒の自主的な参加により、ボランティアの精神も芽生えている。

以上のような取組を通して、今後も、郷土の伝統と文化を尊重し、松岡（高萩市）を愛し、誇りをもつことができる生徒の育成に努めていく。

未来に向かって明るくたくましく学び続ける子どもの育成

鉾田・鉾田北小　中澤　浩

一　はじめに

本校は、鉾田市の北西部に位置し、平坦で温和な気候を生かした農業を基幹産業とする、自然豊かな地域の中にある。

平成二八年鉾田市公立学校施設再編計画に基づき、鉾田北中学校改築に併せ、新設小学校を併設、「小中連携」のモデルケースとして、五つの小学校が統合し本校が誕生した。今年度創立七年目を迎える。

二　目指す学校・児童の姿

全校児童は四一〇名、明るく素直で、何事にも活発に活動している。タイトルは本校の教育目標であり、「活力ある学校」「明るいあいさつ・笑顔あふれる学校」「地域と共に前進する学校」を『目指す学校』とし、実現に向けて、三つのプロジェクトチームでの取組を実践している。知チームでは、「自ら学び豊かに表現できる子」、徳チームでは「進んであいさつできる子」、体チームでは「目標に向かって最後まで頑張りぬく子」を『目指す児童の姿』として取り組んでいる。

三　本校の特色ある取組

３年生レゴWeDo2.0を活用した授業

(一)ＩＣＴ教育の推進

令和元年度「茨城県小学校プログラミング教育推進事業」の取組を継続し、児童のＩＣＴ活用能力の向上を図っている。教育用プログラミングソフト「スクラッチ」を活用してのゲームづくりから研究推進を始め、図画工作科ではレゴＷｅＤｏ２．０を活用しての作品づくり、総合的な学習の時間では、パソコンのカメラ機能を使って撮影した画像をＡＩに読み込ませ、画像の識別や商品の画像から金額が分かるセルフレジの作成を行うなど、様々な教科でプログラミング学習に取り組んでいる。さらに令和二年十月には一人一台端末が整備され、課題であったＩＣＴ環境が大きく改善され、現在では授業支援ソフト「ロイロノート・スクール」を活用し、授業の導入や振り返り、校務や授業の効率化を図っている。学習スタイルは、ペアワーク・グループワーク・クラスワークなど、状況によって使い分け、児童同士で教え合い、理解を深めていく活動を通して、主体的・対話的で深い学びに繋げている。

(二)学校段階等間の連携

同敷地内に小・中学校が併設し隣接する幼稚園を含め、「鉾田北中学校区幼小中連絡協議会」として連携を深めてきた。連携年間カレンダーを基に、異年齢交流による行事の計画運営、教職員交流による情報交換や研修等を実施している。具体的には、中学生による児童への読み聞かせ、児童による園児への寸劇を通しての歯みがき教室、近隣高校生（農業科）との交流による田植えや稲刈り体験、幼小中合同農業体験（イモ苗植え）など、地の利を生かした取組を行っている。他に小中合同の取組として、マナーアップあいさつ運動を六月、十一月に実施し中学一年生と小学生高学年が登校時に一緒になってさわやかな声かけを行っている。

(三)地域人材の活用

本校児童は地域の基幹産業である農業に誇りを感じており、将来目指す職業の一つとして考えている子供も多い。そこで地域人材の活用として、農業に関して豊かな体験活動の充実を図っている。全校児童参加によるイモ苗植えと収穫、三年生による野菜販売体験、「野菜名人を目指そう」と銘打った野菜の種まき等、農業に精通する地域の方を招聘し、子供たちの興味関心を高めている。

またキャリア教育の一環として「職業人に聞く」では、元プロサッカー選手、酪農家、美容師等地域の方を招聘し、六年生を対象にその職業の楽しさや厳しさを学ぶ機会を創出している。

四　おわりに

今年度は本校の象徴である『ひまわり』の頭文字をとって、

ひ　ぴかぴかの
ま　まんまるえがお
わ　わらって元気に
り　りっぱなあいさつ

を合い言葉に活動をしている。児童が笑顔で楽しく生活し、未来に向かって明るくたくましく育っていけるよう、全職員一丸となり、学校経営に全力を尽くしたい。

小中一貫校を活かした教育活動の実践

かすみがうら・千代田義務　岡野　浩則

一　はじめに

本校は、かすみがうら市の北部に位置し、西に筑波山を望む自然豊かな場所にある。令和四年四月に四小学校（志筑小・新治小・七会小・上佐谷小）と千代田中学校が統合し市内初の義務教育学校として開校した。

二　目指す学校像

全校児童生徒数四〇一名（前期課程二六二名・後期課程一三九名）の中規模校である。教育目標は「自ら学び、こころ豊かにたくましく生きる児童生徒の育成」とし、「安全安心・挨拶・授業」を三つの柱に据え、「一人も取りこぼさない教育実践」に努めている。

今年度の重点施策として、「外国語教育の充実」「論理的表現力の育成」「個に対応した教育支援の充実」とし全職員で取り組んでいる。

三　本校の特色ある主な取組

(一)九年間を見通した外国語教育の充実

外国語教育の充実に向けてＣＥＰ（CHIYODA ENGLISH PLAN）を作成し全学年実践している。九学年を四段階に分け、発達段階を考慮し実践している。

・一～二年「英語に触れる」活動
・三～四年「英語に慣れる」活動
・五～七年「定着する」活動
・八～九年「活かす」活動

一～二年においては、学校裁量の時間で「外国語活動」を設定し週一時間を実践している。その際、中学校外国語免許を有する教員が全学年担当し、ＡＬＴと市非常勤講師も含めて三人体制で取り組んでいる。三～九年においても教科担任制で実践している。

また、朝学習として一人一台端末を活用し「英語の語彙力を増やすレッスン（ＬＩＶＥタイム）」を週一回実施している。

(二)論理的表現力の育成

研究主任を中心に全職員が授業力の向上に向けて研鑽を積んでいる。

授業力の向上に向けて「課題提示・導入の工夫」「ゆさぶりのある協働的な学習の場の設定」「振り返りの充実」の三点で重点化を図っている。まず、児童生徒の学習への意欲を向上させるため、課題提示や学習導入時の活動を工夫している。次

１年生の外国語活動

に児童生徒が自分と他者の考えを比較検討したり、情報の共有化を図ったりすることができる場を設定している。その際、児童生徒の考えが揺さぶられる事象等を提示し深い学びにつながるように努めている。最後に活動を振り返り、学習内容を確認し定着を図っている。このような一連の学習の流れの中で、児童生徒の「思考力」向上のため、適切な思考スキルを活動に取り入れるように努めている。このような取組を通して児童生徒の「論理的表現力」を伸ばしていきたいと考えている。

㈢個の実態に対応した教育支援の充実

学校統合前まで少人数で学校生活を過ごしてきた児童生徒の不安感をできるだけ減らし新しい人間関係が築けるようにしていくとともに、配慮を要する児童生徒への教育的支援の充実を図るため、「異学年交流活動の充実」「認知ソーシャルトレーニング（コグトレ）」「ソーシャルスキルトレーニング」などを計画的に取り組んでいる。

週一回朝学習の時間に、社会認知能力の育成に向けてコグトレを継続して行っており、児童生徒たちは集中して取り組んでいる。「異学年交流活動」では全学年種目を実施した体育祭をはじめ、一～四年生の縦割り班活動、五～九年生の毎週の委員会活動など常時異学年で活動できる場を設定している。

四　おわりに

新しい学校がスタートし大きな不安と期待の中、児童生徒と教職員、保護者が協力し全力で取り組んできた。今後も「安心安全な学校」であるとともに児童生徒の成長のため、学校組織が一体となって取り組んでいきたい。

人間性豊かな下館の子の育成を目指して

筑西・下館小　氏家　真理子

一　はじめに

本校は、明治六年二月九日に創立され、十一月三日には、創立一五〇周年記念行事を開催する。文化勲章を受章された陶芸家の板谷波山先生、洋画家の森田茂先生を始め、各界で活躍する方々を多数輩出し、児童の夢や目標となっている。

現校舎は下館城址に建てられ東側には、勤行川（五行川）が流れ、校庭からは名峰筑波山を眺めることができる。学区内には、しもだて美術館等の施設もあり豊かな環境の中で、次世代を担う教育に取り組んでいる。

二　学校経営の基本方針

全校児童は五七二名で、優しく素直で元気に活動している。総括目標である「人間性豊かな下館の子の育成」の実現に向けて、教職員間でビジョンの共有協働意欲、コミュニケーションを図り、日々指導力の向上に努めている。

また、教職員と保護者の行動目標「すべては子供たちの幸福のために」は、長らくＰＴＡ活動の基調として浸透している。

今般のコロナ禍の中、未来に向かって、たくましく生き抜く力を育てたいと思い組織目標を「時代の変化に対応し、自ら課題解決を行い、共に学び合い、助け合い、進んで行動する子の育成」とし、「みとおす」を合言葉に日々生活している。「み（自ら、未来へ）、と（共に学び合う）、お（思いやり、助け合う）、す（進んで行動する）」。児童、教職員が教育活動の様々な場面で「みとおす」を一生懸命体現しようとしている。

三　自ら進める授業改善研修

本校は、昭和五五年から六〇年「形成的評価と授業の改善」、平成二六年の学力向上推進事業授業力ブラッシュアップ研究重点校をはじめ各教科等で研究指定校として実績をあげてきた。

本年度の研究主題は「自ら進んで考え、共に学び合う下館の子の育成～ＳＤＧｓを基盤に社会に開かれた教育課程を実現するための授業改善を通して～」である。

現在、「小中学校における遠隔教育実証研究事業」「ＮＩＥ実践指定」「いばらきサイエンスキッズ育成事業研究」の三つの研究指定を受けている。研究主題に沿っての研究となるよう単元構成を工夫して研究に取り組むよう助言している。授業研究部、調査・分析研究部、学習環境・ＩＣＴ研究部を組織し全教職員が協働して進めている。

四　知・徳・体の基盤づくり

「知」の基盤づくりのために各教科で「聞く、話す、伝える」名人を目指そうと指導している。

「めざせ！聞き方名人」
あ 相手を見て
い 一生けん命に
う うなずきながら
え 笑顔で
お 終わりまで聞く。

「めざせ！話し方名人」
か 簡単な文を
き 聞こえる声で
く 口を大きく開けて
け 決して急がずに
こ 言葉づかいに気を
つけて話す。

「めざせ！伝え方名人」
さ 最初に
し 資料を使って
す すっきりと
せ 整理して
そ ソフトを使って
伝えてみよう。

「徳」では「学校スキルトレーニング」、「体」では家庭と連携した「元気なだてっ子一〇か条」を学校を挙げて取り組んでいる。

五　保護者、地域住民の協力で開催「職業フォーラム」

児童一人一人のキャリア形成と自己実現を図るために「職業フォーラム」を開催している。ＰＴＡ執行部役員の方々が、児童の希望に添った講師を招聘し企画運営に携わってくださる。

児童は、各方面で活躍されている人生の先輩方からの講話を聞いたり、仕事の一部を見せていただいたりする体験をする。本年度のテーマは「仕事の中のＳＤＧｓ」。依頼希望の職種は、スポーツ、医療、飲食、美容、音楽、建築と多岐にわたる。地域住民等の協力を得て、児童が夢や希望ある将来の生き方を考える時間となるよう努めていく。

「職業フォーラム」で
建築の仕事について学ぶ児童

行財政・調査研究委員会の要望や取組

特集２

令和五年度「教育行政に関する要望」―その経過と概要―

行財政委員長　蓮沼　邦彦

令和四年度も新型コロナウイルス感染症防止対策を講じながら、学校における子供たちの安全安心の保障と教育活動の充実を両立させながら学校教育を続けています。

そのような中、令和五年度の教育行政に関する要望書を作成するに当たり、県内小・中・義務教育学校及び小・中併設学校の回答をいただきました。会員の皆様、各校の代表教諭の皆様のご協力に心からお礼申し上げます。

作成しました要望書は、八月二九日に県教育委員会教育長へ直接提出いたしました。要望書の概要は以下のとおりです。詳細は、会員へデータで配付された要望書でご確認ください。

Ⅰ　国への要望

○義務教育標準法の改正による教職員定数の改善

○中学校・義務教育学校（後期課程）の『三十五人学級』の早期実現

○多様な教育課題に対応するための加配定数の増

Ⅱ　県への要望

一　全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びのために

㈠少人数学級並びに少人数教育にかかわること

①「楽しく学ぶ学級づくり事業（小五～六）」の継続

②「中学校生活充実支援事業（中一～三）」の継続

③少人数教育充実プラン推進事業の実施基準の緩和

④特別支援学級の編制基準の見直し

㈡ＩＣＴ活用にかかわること

①教職員のＩＣＴ活用スキルの向上に向けた研修等の充実

②ＩＣＴ支援員等の授業サポート体制の充実

二　学校組織の充実と活性化を図るために

㈠新規採用にかかわること

①新規採用者の計画的・継続的な確保と教員志願者を増やす取組の工夫

②優秀な人材を確保するための選考方法の工夫

㈡人事による活性化にかかわること

①加配教員の配置の充実及び会計年度任用職員（非常勤）の活用方法の見直し

②小学校専科教員配置に係る条件の緩和

③専門的・補助的スタッフの配置の拡充

④欠員の解消のための処遇改善

㈢教職員の育成にかかわること

①小学校における単独校方式による初任者研修の拡充

②二人担任制（初任者と再任用等による）の実施

三　充実した教職員生活の実現のために

㈠教職員の働き方改革の推進と健康管理にかかわること

①働き方改革にかかわる県教委と県学校長会との協働体制の確立

ア　勤務時間の適正化

イ　変形労働時間制導入に向けた体制づくり

②部活動適正化と地域移行へのガイドラインの作成

③教員の持ち時間数縮減のための人的支援

④教職員の働き方改革のための人的支援の継続

㈡教職員の定年延長にかかわること

①教職員の職務の特殊性を考慮した勤務・給与体制の構築

②管理職の延長制度等の構築

四　本県教育の一層の充実・発展を図るための市町村当局への助言について

㈠業務の効率化に対する理解と協力

①作品募集や団体主催行事への参加等についての配慮

②市町村校務支援システムの導入促進

③給食費等の公会計化の実現

④勤務時間外の自動音声装置による電話対応の導入

㈡特色ある学校づくり推進のための予算措置

①ＧＩＧＡスクール構想推進によるＩＣＴ機器等の整備

②新学習指導要領実施に伴うデジタル教科書等の整備

㈢感染症対策に伴う予算措置

①感染症対策等の学校教育活動継続支援事業等の継続

②外部委託業務の拡大・推進（除草・清掃作業等）

調査研究委員会の取組

調査研究委員長　玉井　康浩

Ⅰ　活動のねらい

学校教育における現状や今日的課題等の調査を通して、県学校長会が、その解決に向けた提言・活動等を行うための資料を提供するとともに、各学校の特色ある教育活動の推進の一助とする。

Ⅱ　具体的な活動と進捗状況

三つの部会を組織して、次の

特別寄稿

子供たちが、今も未来も幸せになれる学校を

つくば市教育委員会教育長　森田　充

日本財団が二〇二二年二月に、十八歳に実施した六か国（日本、中国、米国、インド、イギリス、韓国）調査では、日本の若者は、他国の若者に比べ、自己肯定感が低く、夢や希望がない、困難への挑戦心が弱く、社会へ関わろうとする意欲も低いといった、大変残念な結果が示されました。

私たちは、この結果を真摯に受け止め、子供たちの自信や自己肯定感、困難に立ち向かっていく力をどう高めるか真剣に考えなければなりません。そして、子供たちが未来社会を豊かに生きるためには、今後の急激な社会変化に柔軟に対応して、自分で考え判断し、意思決定、行動ができる力、他者と協働し、新たな価値や知識を生み出す力を身に付けられる学校をつくらなければなりません。

これらを実現するためには、教師は、子供が主体的に行動する場、自分で決められる場をできるだけ多く与えること、併せて、みんなで話し合い、合意形成し、誰もが幸せになれるものを作り上げるといった、他者と共に生きる喜びや大切さを感じ取れるような体験を数多くさせることが重要だと思います。

現在つくば市では、つくば市教育大綱の目標「一人ひとりが幸せな人生を送るために」を実現するために、「教えから学びへ」「管理から自己決定へ」「非認知能力の再認識へ」の転換をキーワードに、教育活動を進めています。

今年度は、昨年度に引き続き「教えから学びへ」の授業改善、そして新たに、「管理から自己決定へ」の一つとしてのルールメイキングを共通課題として、全校で取り組んでいます。

授業改善は、子供を自律した学習者に育てることが、目標です。学校全体の改善課題を全員で明確にした上で、各教師が自己の改善目標を定めて、授業を数週間実践します。その実践前後に、児童生徒への授業アンケートを実施し、その結果を比較することで、効果の検証を行います。昨年度の取組では、児童生徒の授業への評価がかなり高まりました。先生方の努力は必ず改善に結びつき、児童生徒に通じると感じました。

ルールメイキングについては、各校で児童生徒が話し合い、保護者も巻き込みながら、一人一台の学習端末をどう使うのか「ＩＣＴ機器の活用、様々な情報ツールの活用のルール」づくりを行います。そして、各校のルールを決める過程や考えたルールを交換します。これらの活動の中で、みんなでルールを決める成功感や幸福感、より良いものを求めていく楽しさを味わってもらいたいのです。

現在は、校長、教頭、教務主任の代表でプロジェクトチームを結成し、「認定ＮＰＯ法人カタリバ」の支援を受け、教員の研修会や児童生徒のワークショップ等を行っています。

民主主義社会の縮図である学校において、子供たちが考え、ルールを決める経験は、必ず社会への参画意識を高めることにつながるはずです。

校長先生方、未来を生きる子供たちの幸せのための、創意ある学校づくりを期待しています。

四つの活動を行っている。

一　今日的課題に関する調査と研究（第一部会）

○第３期中期教育ビジョンの「四か年の活動計画」の最終年度として、実効性のある「働き方改革」の実現に向けて、各学校内の体制づくりや取組、教員の勤務に対する意識等に関する調査を全小・中・義務教育学校の学校長と抽出校の教諭を対象に実施する。その調査結果を分析して、働き方改革の実現へ向けて、今後の校長会や各学校の取組への一助とする。

○進捗状況

・九月　調査依頼
・十月　集約
・十・十一月　集計・考察

二　特色ある教育活動に関する調査（第二部会）

○各小・中・義務教育学校の研究・研修の充実発展に資することを目的に調査を実施し、結果を県学校長会Ｗｅｂページに掲載する。

○進捗状況

・六月　調査依頼
・七月　集約
・八月　集計・Ｗｅｂページ作成
・九月　Ｗｅｂページ掲載

三　勤務実態（時間外勤務時間）に関する調査（第三部会）

○全ての公立小・中・義務教育・特別支援学校を対象に超過勤務時間等を調査する。

○進捗状況

・九月　調査依頼
・十月　調査
・十一月　集計・考察

四　全連小・全日中の調査及び編集等への協力

○全連小各種委員会の調査協力

次の八つの調査について、各ブロック毎に分担しながら実施する。

・八月　調査依頼
・九月　集約・送付

【調査内容】

・教職員定数改善
・教育環境整備
・教育課題
・人材育成・健全育成
・小学校における教員の養成・育成
・教育課程
・特別支援教育

○全日中「全国中学研究校便覧」の掲載校を各ブロック毎に一校ずつ推薦する。

掲載校は次の五校

・大子町立南中学校
・高萩市立松岡中学校
・鹿嶋市立高松中学校
・桜並木学園つくば市立並木中学校
・桜川市立岩瀬東中学校

推薦に当たっては、第二部会の特色ある教育活動に関する調査等を参考にする。

※校務ご多用のところとは存じますが、引き続き各種調査へのご協力をお願いいたします。

経営研究

創意工夫を生かした特色ある教育課程

生徒の「自主・自律」を育む教育活動の展開

東茨城・大洗南中　寺門　剛美

本校は、太平洋が眼下に広がる高台に位置し、生徒数一〇九名の小規模校である。「南中の三つの宝『時・礼・美』」を大切にしながら、自主・自律を目指した学校づくりを行っている。

一　特色ある取組

㈠教科教室型システムの活用

本校は、自ら考え行動できる生徒を育むことを柱とした「教科教室型システム」を茨城県内で初めて導入し、今年で二二年目を迎えた。全ての教科が専用の教室とメディアスペースをもち、生徒は毎時間、教室を移動して学習することで学びに向かう力を付けてきた。さらに、この空間を最大限に生かす学びが教科の特性を引き出し、教師にとって多様な指導方法を可能にしている。本年度は「『対話』から未来を拓く」を研究テーマに、「対話」を重視した、協働的な学習活動を追究している。どの学習場面においても、自分の考えをもち、友達と意見を交換しながら課題に対する納得解を練り上げていく姿が見られている。

㈡自発的な活動の充実

よりよい学校をみんなの手で創るために、「サークル」と呼ばれる組織がある。「人のために」「ものを大切に」「学校生活を豊かに」をキーワードに生徒が自らを振り返り、問題を明らかにして活動内容を決めている。学年・学級のバランスや人数制限が一切ない五つのサークルと生徒会本部役員が連携して、自発的・自治的な活動を続けている。

㈢ＳＤＧｓを考える体験活動

地域の豊かな人的・物的資源を有効活用できることは本校の強みの一つである。例えば、目標７「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」では原推研出前授業や原子力施設見学を、目標14「海の豊かさを守ろう」ではアクアワールドをフィールドとした理科授業や地元の魚を使った調理実習を、目標11「住み続けられるまちづくりを」では、まちづくり推進課出前授業や津波避難施設見学による防災・減災学習を行っている。専門の知識や経験をもった方々と関わることで持続可能な社会について共に考える機会となり、総合的な学習の時間のテーマ「大洗町を見つめ直して」に繋げている。

二　成果と課題

恵まれた教育環境のもとで、仲間と協働し、お互いを認め合う教育活動の充実を図ることによって、生徒一人一人が自他を大切にする心情や主体的に行動しようとする態度が育っている。

今後は、今年度、大洗町として立ち上げた「大洗うみ・まちコミュニティスクール」を推進しながら、生徒がより一層輝く特色ある教育活動を展開していきたい。

「対話」を重視した、協働的な学習

地域と共に歩む小中一貫教育の取組

鹿嶋・高松中　山本　勇

本校は、鹿嶋市の南部に位置し、生徒数一一三名の小規模校である。小中一貫教育を推進するとともに、九年間の学びを見通した学校づくりに取り組んでいる。また教育目標の「豊かな学びを創造し地域と共に伸びる高松っ子」の育成を達成するために、特色ある五つの学びの充実に努めている。

一　学習指導の充実

九年間の学びを見通した学習の系統性を重視するために、小中教職員の乗り入れ授業を推進している。特に今年度は小学校高学年において教科担任制が進展し、小五・小六は九教科中七教科と割合が高くなった。さらに小三・小四の音楽・図工・体育等にも広げて、専門性を生かした学びの実現に取り組んでいる。

二　個別支援の充実

小中一貫した「高松スタンダード」を活用してルールを確立するとともに、安心できる学校づくりを目指している。また今年度はサポートチームによる不登校生徒支援の強化を図っている。毎週火曜日に生徒指導会議を実施して今後の対応を考えたり、ＳＣ・鹿嶋市教育センターとの連携やＩＣＴ機器を活用した個別支援に努めたりして、個人に寄り添う体制づくりを重視している。

三　英語教育の充実

英語の授業を週五時間に拡充し、英会話力の向上や各種英語検定等の対策を進めている。また小中二人のＡＬＴが参加するコミュニケーション英語学習に継続して取り組んでいる。このことが小中合同コミュニケーション英語の充実に繋がり、英語プレゼンテーションフォーラムへ積極的に参加する要因となってきた。

四　キャリア教育の充実

教育活動全般を通してキャリア教育の視点を大切にする活動をしている。キャリア・パスポートを効果的に活用して基礎的・汎用的能力の向上に努めている。今年度はコロナ禍でも工夫して実施できる小中合同職業人講話を計画して、継続した職

業観の育成を目指している。また地域人材を授業で有効に活用する等地域との協力・連携を強化してキャリア教育の進展に取り組んでいる。

五　交流・体験活動の充実

小中合同による各種行事等を通して、豊かな心を育む取組を重視してきた。今年度は合同あいさつ運動や文化祭、幼小中避難訓練等で連携を強化し、地域との関わりを深める機会も増えている。また小学校高学年対象の部活動体験は十月～十一月の期間に今年度も計画し、異学年集団活動による所属感の高揚を目標としている。

令和五年の施設一体型小中一貫校に向け、更なる特色を引き出す学校づくりに全教職員が取り組んでいる。

中学生による小学生への英語プレゼン発表

みんなが学ぶ　みんなが育つ　地域と共に成長する学校づくり

牛久・向台小　野上　徹

一　はじめに

牛久市では全ての公立小・中・義務教育学校にて「一人残らず質の高い学びを保障する学校づくり（学びの共同体）」を学校経営の柱として教育活動に取り組んでいる。「学びの共同体に取り組む学校」とは、子供も、教師も、保護者や地域住民も、みんなで学び育ち合う学校である。そこで地域全体の学校に対する興味・関心が高まるように、各校とも学校運営協議会を組織し、コミュニティ・スクールを立ち上げた。

二　共に学ぶ授業研修会

学習指導要領の「社会に開かれた教育課程」は、学校（授業）を地域に開き、教育課程を通して、学校の教育目標を達成するとしている。そこで、本校では、定期的に実践している校内授業研修会を地域に開き、教師による授業づくりを地域が教師と共に学ぶことで、学び育ち合う学校の構築に力を注いでいる。具体的には、学校運営協議会のメンバー（保護者や地域住民）が、教師と共に同じ授業を参観し、参観後は、参観者全員で授業のリフレクションを行う。その中のグループ協議では、学校運営協議会メンバーも教師と一緒のグループに入り、見取った子供の学びについて、その子供の固有名詞を挙げながらリフレクションを行う。その後、各グループで出た内容について全体共有することで、さらに深まったリフレクションが行われるのである。

三　社会教育主事による架橋

授業参観は「授業中に子供が『どのようにして学んでいるか』の事実を見取る」ことを重要視している。つまり、授業者を観察するのではなく、「子供の学ぶ姿を見取る」ことを参観の視点としている。そこで、市教育委員会社会教育主事が授業研修会に参加し、学校運営協議会メンバーに参観の視点を分かりやすく説明する。授業を参観しながらリアルタイムに説明を受ける学校運営協議会メンバーは、授業づくりについて学び、そこから見えてくる「教師による授業改善」について理解を深めるのである。

四　おわりに

授業研修会に参加した学校運営協議会メンバーからは、次のような声が聞かれた。「先生たちがここまで研修しながら子供たちのために授業を作っていることが分かり、学校への信頼がより高まった。」（保護者）

「授業の振り返りの先生方の話を聴くととても勉強になった。そこで出ていた子供の問題を、学校と地域が共有し、同じ目標に向かって子供を育てていくことが大事だと分かった。」（地域住民）これらのコメントから学校理解の高まりを感じた。学校と家庭と地域が「サービス」ではなく「責任」でつながれば、子供も教師も保護者や地域住民もみんなが学び育ち合う学校になるはずである。本校ではこれからも授業を地域に開き、共に成長していく所存である。

地域住民と共に学ぶ授業研修会

コミュニケーション能力を高める教育活動の展開

下妻・上妻小　三谷　定幸

本校は、下妻市の北部に位置し、東に筑波山、西は鬼怒川に接し豊かな自然に囲まれている。児童数二九八名、職員二七名、地域に支えられ来年度に一五〇年を迎える学校である。児童は素朴で活発である一方、コミュニケーション能力に欠ける面がある。

一　特色ある取組

㈠全校一斉下校

本校は、低学年が安全に下校できるように、通学班による一斉下校としている。そこで一・二年生の教育課程外の六時間目を「ゆとりの時間」と称し、補充的な学習として活用するが、基本的には校庭で外遊びを実施している。教員監督の下、友達と自由に一緒に遊ぶことで自然とコミュニケーションがとれるようになり、友達の輪の広がりや深まりが生まれ、友人関係の基盤づくりに役立っている。

課題

コミュニティ・スクール＝学校の応援団

県学校長会副会長　湯原　深雪
（北茨城・関本小中）

コミュニティ・スクールとは、「学校運営協議会」を置く学校です。

学校運営協議会の主な役割には、「校長が作成する学校運営の基本方針を承認する」、「学校運営に関する意見を教育委員会又は校長に述べることができる」、「教職員の任用に関して、教育委員会規則に定める事項について、教育委員会に意見を述べることができる」等が挙げられていますが、こう書き出してみると、少し堅苦しい感じがするのは否めません。

ですので、もう少し普段の学校に引き寄せた言葉で言い換えると、コミュニティ・スクールとは、学校と地域住民等が力を合わせ、「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みということになるかと…。

本校も手探り状態からのスタートでしたが、昨年度からコミュニティ・スクールの仲間入りをしました。その手探り状態から抜け出せたのは、まさに「腑に落ちる」という経験があったからだと思っています。

それは、沖縄国際大学の照屋翔大先生にお願いした講演会の中で起こりました。学校運営協議会運営への迷いを払拭してくれる「方向性」を示すキーワードが次々と現れたのです。

「グランドデザインが中核」、「地域の子供の育ちがキーワード」、「正解はなく、わが校・わが町としての型を大事に」等々。

中でも「ハッと」させられたのは、「学校運営協議会はいわば学校の応援団」という言葉でした。「ああ、そうか」ストンと胸に落ちました。「難しく考えすぎていたのかもしれない。子供たちの、学校の応援団になってもらうための会を運営していければよいのだ」と。

もちろん各校での主体的な取組と教育委員会による積極的なサポートの両輪が大事なことはいうまでもありません。

しかし、子供たちを中心に据え、学校と地域が、現状に即した「自分たちの小さな取組」を重ねていくことこそが、コミュニティ・スクールの成功のカギではないかと思います。

二年目の現在、子供たちを真ん中に、学校と地域の取組が少しずつ進んでいます。

(二)ＩＣＴの活用

本校では令和三年初頭に一人一台の端末が導入され、「ＩＣＴを活用した思考力・判断力・表現力の育成」について学校全体で研究して二年目となる。現在、低学年では生活科「ミニトマトの観察記録」作成による表現力の育成を行い、中・高学年では教科・道徳や学級活動において、学習支援ソフトのベン図、ピラミッドチャートなど「シンキングツール」を活用して自分の考えを入力し視覚化すると同時に理由付けも行う。そしてペア、グループ、学級全体で交流する場を設け、表現力や判断力の育成を図っている。

自分の考えの根拠を明確にすることにより、タブレット画面、スクリーン画面を活用しながら、自信をもって発表できる児童の育成を図っている。

(三)交流活動

本校には敷地内に幼稚園が併設されており、運動会や避難訓練を一緒に行うなどいつでも交流できる環境にある。休み時間には学級ごとに幼稚園に出向き、和やかに交流している。園児も児童もとても楽しみにしている時間である。

また、本校の学区内に下妻特別支援学校があり、コロナが流行している現在は、オンライン交流とし、互いの自己紹介や、作品紹介、国語の授業では漢字を学習したり、音楽では一緒に歌ったりなど、お互い表現する楽しい交流を目指している。

二　成果と課題

全校一斉下校は、児童の安全が守られると保護者から喜ばれている。ＩＣＴを活用した授業づくりでは、ＩＣＴだけに頼らず、「書く」活動を重視したノート指導にも重点をおき、学力の定着を図りたい。特別支援学校との交流では、特別支援学校の児童は楽しみにしており、本校の児童は障害を越え、同じ小学生として交流が図れている。さらに特別支援学校との交流を積みあげていきたい。

ＩＣＴ端末で発表する児童

市町村教育委員会と学校長会

中央

那珂市教育委員会との連携

那珂・五台小
増田　忠廣

那珂市学校長会は、小学校九校、中学校五校の計十四校で構成されており那珂市教育委員会と密接な連携を取りながら学校経営の質を高める研究と実践に努めている。市教育プランに掲げる「豊かな心を育む学校教育の充実を図る」ことを目指し、その具現化に向けて取り組んでいる。学びと育ちの縦と横の連携を目指して、カリキュラム・マネジメントに基づき小中一貫の教育の充実に向けて、「学園の個性を生かした教育」、「保幼小中連携の推進」、「教科担任制」等に取り組んでいる。

一　市教育委員会と共にあゆむ定例学校長研修会

学校長研修会を毎月一回定例で開催している。那珂市学校教育推進会議として、教育長・課長・総括・指導室長が同席され助言・指導と共に市の教育施策や事業の確認をしている。研修会では、教育長より、毎回「教育長室の窓」を基に学校経営や学校運営、校長としての物事の考え方や判断について、人財育成について、小中一貫教育について、様々な視点からの講話をいただき、日々の学校経営・学校運営にご示唆いただき、役立てている。市教委との強い連携で、十四校が足並みを揃えてまとまって学校経営に当たることができている。コロナ禍では、臨時校長会も必要に応じて開催されて、市教委と校長会で直接顔を合わせて、情報共有と指導・助言のもと児童生徒のために充実した連携を図っている。

二　教職員の資質・能力の向上

本年度よりミドルリーダーの教員も対象にして学校管理運営研修会を実施している。教頭部会・教務主任部会・ミドル部会を設置して学園・学校の実践研究を基にした発表と協議を通して本市及び本県教育の推進に貢献できる優れたスクールリーダーの育成に取り組んでいる。

さらに、学校経営研修会として本年度は、柴原宏一氏（茨城大学）をお招きして、「教員で学校は変わる」という演題で、校長・教頭・教務主任・ミドルリーダーを対象に講話をいただいた。教員一人一人の取組で、管理職の取組で学校は変わることを具体的に示唆をいただいた。

三　九年間の系統的・連続的な小中一貫教育の推進

①学園内小中学校の共通教育目標・目指す児童生徒像の設定・共有

②九年間の系統的・連続的な一貫教育の実践

③学園の子は学園で育てる意識の共有、教職員・保護者・地域による協働実践の三つの視点で取り組んでいる。

市小中一貫教育推進委員会を通して、小中一貫の日の取組、発表会に向けて学園の小中学校で協働している。

四　働き方改革の推進

働き方改革ワーキンググループを設けている。教頭・教務主任代表で構成して、さらなる推進の検討をしている。市教委と連携して、部活動の地域移行も位置付けて検討を進めている。

県北

日立市教育委員会との連携

日立・会瀬小
宮田　浩昭

日立市学校長会は、小学校二四校、中学校十四校、義務教育学校一校、特別支援学校一校の計四十校で構成されている。

今年度は「未来を拓く『ひたちっ子』の育成」を活動目標に掲げ、一人一人が輝く学校づくりに取り組んでいる。毎月一回の定例会には、市教委から教育長をはじめ、各課長、教育研究所所長等、指導助言や諸連絡をいただき、時節に合った教育課題に対し、同一歩調で対応を進められるようにしている。

一　「ひたちらしさ」の特色ある教育活動の連携推進

日立市はこれまで「日立市教育大綱」や「日立市教育振興基本計画」に基づき、「教育は日立市で」と思われるよう、自ら学び考える確かな学力の育成と、学校と地域の協力関係の下、保護者や地域住民等が教育に携わってきた。全ての小中学校で、一時間完結型授業の実現や、ゴールから考える授業づくり、指導と評価の一体化を授業の基本に据え、授業の質を高め、全ての児童生徒に確かな学力を保障することを重点として連携してきた。Hyper-QUの実施学年拡大、ＮＩＥ教育で複数新聞購入の予算措置、英語教育の推進、特別支援教育の充実等で、学力向上のための連携を充実させている。

二　新型コロナウイルス感染症への連携

新型コロナウイルスに関して、学校長会が市教委と直接協議をして、修学旅行前の三日間のリモート学習を実施することになり、学級閉鎖で急に行けなくなるようなことはなくなった。さらに市教委が所有している簡易検査キットを修学旅行に行く学校に貸し出すことで、現地で発熱した児童生徒への対応が容易になった。発熱者への対応や緊急の場合の費用等、教育委員会との連携により、大きな安心感に結び付いているといえよう。

三　魅力ある学校づくりと働き方改革の推進

二〇二二年度から十年間の日立市総合計画が策定され、「教育・文化」の項目では、取組の一つに「確かな学力の向上・相談支援体制の充実と教職員の働き方改革」を掲げて、ＧＩＧＡスクール構想を進めている。各校にはＩＣＴ支援員が派遣され、教師向け授業支援や、児童生徒の活用サポート等、その支援は心強い。働き方改革への一助となり、授業改革にも繋がる「デジタル教科書」「電子黒板」も順次補充している。学校長会の要望は協議書委員会がとりまとめ、校長会と教育委員会との協議の中で、予算や施策で現場の意見を反映させている。

以上、学校長会と日立市教育委員会は車軸の両輪として教育活動を充実させ、「教育は日立市で」と保護者が思う魅力ある教育活動を多く実践している。今後とも連携を実のある成果として発信していきたい。

梅のかおり

—先輩校長から—

経験に勝るものなし

前・城里町立
沢山小学校長
長山　透

私が二十代の時、小中学生の生活体験に関する調査で、「日の出を見たことがありますか」という項目があり「見たことがない」と答えた割合が高かったことに驚きました。

当時、那須甲子少年自然の家での宿泊学習の班別行動を計画していたので、その活動の中に赤面山頂で日の出を見る活動を学年会で提案しました。大丈夫かという意見もありましたが最終的に学年の先生方に理解していただきました。

宿泊学習二日目、朝の暗いうちにヘッドライトを点けて二班の先頭を私、最後尾を学年副主任の隊列で登山を開始しました。生徒は、暗い中ではぐれないよう大きな声を掛け合いながら、何かあればすぐに先生に知らせる約束を守って登りました。

途中ロープをつたって登る緊張する場面もありました。日の出の時刻に山頂までたどり着けないと判断し、赤面スキー場で日の出を待ちました。地平線が明るくなり太陽の光を感じた時、生徒の「きれい」という言葉が象徴するように、全員で感動を共有した覚えがありました。

「体験あって学びなし」と指導を受けましたが、「生徒のために…」と言いながら教師の満足で終わったり、体験が遊びになってしまったりしていた自分には厳しい言葉でした。

現在、コロナ禍で体験活動は制限されていますが、ねらいを明確にし、できれば子供たちに様々な体験をさせていただけたらと願っています。

「経験に勝るものなし」

校長先生方へ心からエールを！

前・東海村立
中丸小学校長
藤田　洋一

三八年間に及ぶ教員生活、とりわけ、校長職の重責を何とか自分なりにやり遂げ、無事定年を迎えられたこと、安堵感と感謝の気持ちでいっぱいです。

長い教員生活には様々なことがありましたが、最後の二年間はまさかのコロナ禍…、予想もしていなかった制約の多い日々となってしまいました。しかし、そのような状況の中でも子供たちは挫けることなく、明るさと人への優しさを失わず頑張っていました。そして、それを支える先生方の底力ー臨機応変な対応力、発想力と実行力も強く感じました。

今年度に入り、国や県主導の行動制限はなくなり、それに伴う長期の臨時休校もなくなりましたが、この原稿を書いている八月下旬、未だ感染収束の見通しは見えません。校長先生方には判断に迷うときがあるかと思いますが、校長仲間で手を携え、是非前向きな気持ちで経営に取り組んでいただきたいと思います。子供たちの安全・安心を保障しながら、困難な状況下でもいかにしたら子供たちが生き生きと主体的に活動し、笑顔いっぱいの学校生活を送れるかを本気で考え、協働して実行に移す校長先生の熱い思いはきっと子供たち、そして教職員や保護者に伝わるものと信じています。

退職後、幼稚園長を拝命した私ですが、これまでよりゆとりのある時間の流れの中で引き続き子供たちと関われる場を与えていただいたことに感謝しつつ、熱い思いをいつまでも大切に生きていきたいと思っています。

教職員あっての学校経営

前・日立市立
宮田小学校長
鈴木　裕一

様々な方々のおかげで三七年間の教員生活を無事終えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

「社会に出ると恩人だらけだ。だから、自分が受けた『恩』は後輩や部下に返せ。」と、尊敬する先輩から教えていただいたことが、今も脳裏に焼き付いて離れません。そこで、学校経営の根幹と考え実践した一部をお伝えします。

学校経営は、校長一人では何もできず、教職員全員の力が頼りです。四月一日には、「責任はとる」「何があっても教職員は守る」「誰も不幸にしない」と宣言し、心配事や悪い情報こそすぐに報告するように徹底しました。

次に、教職員に気持ちよく働いてもらうために、働きやすい環境づくりを行いました。職員室が機能的に、そして明るくなるように、整理整頓と掃除を徹底的に行い、職員同士の顔の見える化、仕事の見える化を図りました。さらに、教職員同士や教務部に気軽に相談できるよう、教務部がいつも明るく笑顔で仲の良い姿を見せました。何があっても「お互いの悪口や愚痴を教職員の前で絶対に言わない。」ことを徹底しました。

人は顔を合わせれば自然とあいさつや言葉を交わします。お互いを理解する最も簡単な方法は、コミュニケーションの回数を増やすことです。すべての教職員と一日に二回は話ができるような仕掛けをしました。その中で傾聴と気持ちのこもった感謝と労いの言葉かけを行いました。

現職の方々の学校経営に、少しでもお役に立てば幸いです。

好きだから続けられたこと

前・鉾田市立
白鳥東小学校長
木下　健

令和四年三月末、鉾田市立白鳥東小学校の閉校とともに三六年の教職生活を終えました。

私は、名古屋市の中学校で六年間勤務した後、三十歳の時、縁あって茨城県に来ました。

私が教師になってから、自分

が好きで、ずっと続けてきたことが三つあります。

一つが、あいさつです。「あいさつだけは誰にも負けない。」そんな部活やクラスを目指して子供たちとともにずっと生活してきました。校長になってからも毎朝、昇降口で子供たちとあいさつする自分がいました。

二つ目は、子供たちとともに遊んだことです。三五歳で初めて小学校に勤務した私は、授業だけでなく休み時間も子供たちと運動場にいました。滑り台から落ちた一年生にすぐ気付いたり、けんかしている子供たちの所に行ったりできました。卒業生から、「先生と遊んだことが一番楽しかった。」と言われた時、自分が動ける限り遊ぼうと決め、結局最後まで子供たちと遊んでいました。今年もらった子供の手紙にも「校長先生いっしょに遊んでくれてありがとうございました。」という手紙が一番多かったです。

三つ目は、学級通信です。クラス一人一人のよいところを見付け、よいクラスを作ろうと始めたことが、校長として、学校だよりで、子供たちや先生たちのよさや様子を家庭や地域に伝えることにつながりました。

校長先生が楽しんでいると学校全体がよい方向に進みます。学校経営を楽しんでください。

寄り添いながら

前・美浦村立
木原小学校長
戸張　深雪

多くの皆様に支えられ、無事に退職を迎えることができました。今は感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

現在は、週二日、初任者指導教員として若い先生方への指導を通し、学校教育に関わらせていただいています。今までとは、また違った形の勤務ということで、とても新鮮な気持ちで生活しております。

朝から教室で子供たちと過ごしていると、自分の担任時代を思い出し「やっぱり子供たちと関わりながら生活するのはいいなぁ。」と改めて感じます。若い二人は、なおさらのこと。二人とも教壇に立つことを夢に一人一人の子供たちに積極的に関わっています。授業後の研修で指導したことが、次の週で活かされていたり、自分なりに考え工夫して取り組んだりしている姿を見ると、若い二人の意欲と力強さを感じます。学校は子供が中心です。子供たちの「できた。」「わかった。」という目の輝きに、教えることの喜びを感じ、教員という職業に誇りをもてるよう、私自身しっかりと寄り添っていきたいと思います。

私のできることはささやかですが、初任者の先生方が少しでも夢に近付けるよう、教員としての今までの経験を伝えていくとともに、新たな時代にふさわしい研修を進めていくことで、初任者指導教員としての責任を果たしてまいります。

引き続き学校教育と関わる機会をいただいたことに感謝するとともに、初任者の先生方とともに自分自身も成長していけるよう努力していきたいと思います。

日日是好日

前・利根町立
利根中学校長
浅野　恵次

定年退職最後の一年は、どんな一年にしようか希望に満ちた気持ちで新年を迎えたが、それから間もなくしてコロナが来襲した。

過去に前例のない全ての学校の一斉休校は約三か月にも及び、六月からの分散登校、夏休み返上の通常授業と、学校はコロナ対策に翻弄され、校内外でのコロナ感染防止に最大限の神経を使った。

私が、中学校の校長として最も悩み辛かったのは、生徒から楽しみを奪ってしまうことであった。特に当時の三年生には大変に辛い思いをさせた。これまでの努力を発揮する場であった最後の総体、生涯の思い出となるはずの修学旅行を中止にしなければならなかった。それは、まさに断腸の思いであった。生徒の多くやその保護者には泣かれた。あの年は彼らだけではなく日本中の学生や生徒、児童が、かけがえのない大切な思い出を失ってしまった。

世の中には、自分の力ではどうにもならないことも多い。コロナ禍ではそのことをいやというほど実感させられた。しかし、その反面にテレワークやリモート会議、オンライン授業等が広がり、会議の削減や短縮も実現した。このことは教職員の働き方改革や業務改善にも生かされている。

「日日是好日」私が定年後に肝に銘じている言葉である。日々の理不尽さを嘆いていても始まらない。大切なのはどんなことでもそのまま受け入れ、前を向いて生きることである。これから先、何年働けるかわからない。「今、元気に働ける幸せ」に感謝し、毎日が好い日になるように一日を大切にして生きていきたいと思う。

感謝の心を胸に

前・境町立
境第一中学校長
篠崎　浩

三七年間を振り返ると、多くの方々にお世話になり、感謝の気持ちで一杯です。最後の二年間、教職の集大成のはずだったが、コロナと向き合う日々でした。この時代に生きる人として、出来る事、学べる事等、限界まで絞り出しました。共に考え、創造し続けた子供たち、共に苦労した職員に感謝です。支えてくれた保護者の皆様、町関係者の方々にも感謝です。

しかし、自分の持っている力を全て出し切れず、悔いが残ります。沢山出来なかった事がありました。だからこそ、感謝の心を胸に、これからのステージで、先生方はもちろん、関わる人たちの役に立ちたいと強く思いました。そのためには、チャレンジする心を持ち続けることが大切だと考えます。

四月から、毎日、散歩を始めました。公園で触れ合う自然や人を感じながらチャレンジについて自問自答しています。今、次の二つの事にチャレンジしています。

一つ目は、現在勤務している県教育研修センターで、先生方

を支援するとともに、「自信と勇気」を届けられるよう関わっています。教師としてのポテンシャルを高め、スキルを伸ばしていければと思います。

二つ目は、十二年前に取得した「コーチング」の資格を最大限活かし、様々な人たちの支援をしていきたいと考えています。現在、より以上を目指してブラッシュアップに取り組んでいます。その中で、コミュニケーションに不安を抱えている人たちに直面し、支援の必要性を感じています。

「チャレンジ」は、自分自身を変え、ブラッシュアップするチャンスをもたらしてくれます。「感謝の心を胸に」、日々考え、様々なことにチャレンジしていきたいと思うこのごろです。

初心にかえって

前・古河市立
下辺見小学校長
桑名　豊

今年三月三一日をもって、三四年間の教員生活を終えることができました。これもひとえに、今まで出会った児童生徒の皆さん、苦楽を共にした同僚の先生方を始め、関わってくださった全ての方々の支えがあったからこそと、感謝の気持ちでいっぱいです。

四月からは、再任用として複数担任制加配の仕事をいただき、初任者の先生と一緒に日々奮闘しています。私自身、この未経験な仕事に当初は戸惑いがありましたが、「何も経験がないんです。」そんな言葉に「最初は私がやってみるから。そして少しずつ一緒にやってみような。」（立派なこと言っちゃって大丈夫かな？）こんなスタートでした。さて、いざ教室に行ってみると、方や元気いっぱいの五年生、一方はほぼ二十年ぶりに小学校の担任をやる還暦を過ぎたおじさん、なかなかうまくいきません。すぐに、引き出しに頼りすぎて、今いる子供たちを正面から見ていないことに気付かされました。私自身「子供から学ぶ」大切さを忘れていたのです。一方初任者の先生は、悩みながらも子供たちとの関係を少しずつ築き、着実に成長しています。

二学期に入り、現在は初任者の先生がほぼ八割の教科をＴ１として行い、私がＴ２で支える体制ができてきました。今後も引き続き「子供から学ぶ」大切さと、「年は離れても同じ五年担当。悩みは言い合おう。」と言い続けようと思っています。初心にかえることをこれからも忘れずに、がんばっていかねばと思う今日この頃です。

読んでみませんか

10年後の子供に必要な「見えない学力」の育て方
「困った子」は「困っている子」

著　書　大阪市立大空小学校
初代校長　木村　泰子

筑西・関城東小　沼田　洋子

数年前、管理職が集まる研修会で「みんなの学校」という映画を視聴する機会を得た。著者である木村康子氏が初代校長を務めた大阪市立大空小学校の一年間を追ったドキュメンタリー映画である。この映画は、当時話題を呼び、文部科学省特別選定作品にも選ばれ、様々なメディアで取り上げられていた。

当時教頭だった私は「障害の有無にかかわらず、すべての子どもがともに学び合い育ち合う教育に力を注ぐ」という著者の姿に、大きな感銘を受けた記憶がある。

大阪市立大空小学校は、開校当時、発達障害と診断された児童や、特別な支援や配慮を要する児童が多数在籍していた。いじめを受けて学校に通えなくなったなど、様々な理由で転校してきた子も数多くいたという。そのような中で、不登校はゼロ。学力も高い。一体どうすればそんな学校をつくれるのか。

現在、私が勤務する学校には、全児童の十四％にあたる児童が特別支援学級に在籍しており、通級指導教室や日本語指導教室で支援を受けている児童を合わせると、全児童の二十％近くにも及ぶ。離席や教室脱走、大声で喚く（時に泣き叫ぶ）等、不適応を起こす児童は後を絶たず、教師は日々、児童の対応に追われている。

子どもたちを変えるには、まず教師が変わらなければ…。現状を打破するためのヒントを求めて、本書に手を伸ばした。

本書は、著者の言葉を借りるならば、「大空小学校での取り組みと、子どもたちから学んだことをベースにした子育て論」である。「教育論」ではなく「子育て論」であるから、当然、教師だけでなく、親へのメッセージも多く綴られている。十年後の社会を生き抜く子どもを育てるために、教師として、また、親としての在り方を深く考えさせられる内容である。

著者は、これから「多様性」「共生」「想定外」の社会で生き抜くためには、四つの力が必要だと述べている。それは「人を大切にする力」「自分の考えを持つ力」「自分を表現する力」「チャレンジする力」である。そして、この四つの力こそが「見えない学力」そのものであり、この「見えない学力」は、子ども同士の関係性（学び合い）の中でしか育たないという。

本書では、この四つの力の育て方について、大空小学校での子どもたちとの心温まるエピソードを交え、著者からの熱いメッセージとともに語られている。

本書の最後に、木村氏はこう述べている。

「学校のリーダーは校長、家庭のリーダーは親。子どもの前ではすべての大人がリーダーです。リーダーの仕事は『どう行動するか』でしかない。」

「子どもがその子らしく、誰もが大切にされる社会をつくる大人に育っていく。そのための覚悟を持ってください。」

本書を読む前、私は、勤務校の課題を解決するには、教師一人一人の指導力向上と、そのための研修の充実が重要だと考えていた。しかし、大空小学校の実践に触れ、子どもたちや教師が変わっていく様子を目の当たりにし、それよりも、もっと大切なことがあると気付いた。目先のことに捕らわれ、教育の本質を見失ってはならない。私たちは「覚悟」を持って、一人一人の子どもにしっかりと向き合えていたか？

教育は、将来の社会を形成する大人を育てること。私たち教師の責任は重大だ。初心に戻り、教師とは何か、教育とは何かを、改めて見つめ直すことができた。

ひばり

画・「実り」

郷土教育

常陸大宮・山方南小
松本　直人

兎追いし　かの山
小鮒釣りし　かの川

唱歌「故郷（ふるさと）」の冒頭です。陽を浴びて緑に輝く野山や泳ぐ小魚がはっきり見える透き通った小川など、故郷の美しい風景が目に浮かびます。

私が勤務する山方南小学校においても、同様の風景が数多くあります。校長室から見える緑の木々、心地よい鳥の囀り、校舎の一室から見える夕日、鮎が遡上する渓流。このように美しい風景を日常的に見ることができることにとても幸せを感じています。

学校教育では、今、郷土教育が重要視されています。子供たちは、自分が生まれ育った故郷の自然や歴史、文化から実に多くの影響を受けて成長していきます。

常陸大宮市には、魅力的な地域素材が数多く存在します。地域のよさを積極的に取り上げ、地域と自分の将来をつなげる教育に力を注いでいきたいです。

大切なこと

那珂・菅谷小
武居　幸雄

盆中、「秋田・真冬の自販機の前で」というドキュメント番組を目にした。その自販機は、日本海を望む秋田港近くの路上脇で働き続けていた。昭和四六年に設置されて以来、自販機の世代交代をしながら二四時間営業。二百円を投入すると約二十秒で出てくる温かいうどんが、二百五十食以上売れる日もあったという。そこを訪れる利用客の感想は、どれも人間模様を感じる内容だった。中でも、「私がヤンチャしてた頃、ここに来るとなぜかほっとした。誰かが必ず声をかけてくれた。自分の息子にも何かあった時は、ここに来るよう話している。」と十代の息子に熱く語っていた母親の言葉が強く心に残った。

ＡＩの進化とともに、社会はめまぐるしく変化し、人の価値観も多様化している。我々教師にとって大切なこと、それは今を生きる子供たちに寄り添い、学校が居場所となるよう努めていくことではないかと感じた。

五感で味わう

常陸太田・里美小中
根本　光倫

コロナ禍と言われて三年目の夏を迎えた。この二年半の間、以前は年に数回は楽しんでいた「山歩き」を中心とした自然の散策からも遠ざかっていた。行動制限もない今夏、久しぶりに自然の散策を楽しみたいと、自宅から四十分ほどの福島県矢祭町にある滝川渓谷に出かけてみた。滝川渓谷は、全長三キロメートルの遊歩道内に四八滝が連続する東北最南端の秘境と言われる場所である。

駐車場から百メートルも山間に入ると、渓谷の清流からの涼しい空気に包まれる。遊歩道を進みながら時折触れる水の心地よい冷たさや豪快な瀑音、巨大な奇岩や岩肌を覆う苔と樹木の緑は、酷暑日であることを忘れてしまうほど、素晴らしく心地よい時間を与えてくれた。山頂では、十割手打ちそばを、その香りも一緒に存分に堪能することもできた。

近年はスマートフォン一つでできてしまうことが多くなったが、改めて、五感を使って味わい、楽しむことの良さを実感した。

単身赴任と自主性・主体性

神栖・大野原西小
花ヶ崎　圭一郎

今から六年前、新任校長として常総市に赴任した。現住所の神栖市からは遠く、通勤は難しいと考え単身赴任を選択した。

一人暮らしは若い頃に経験していたが、五十を過ぎてからの生活は「洗濯物は毎週持って帰るの？」「料理はできるの？」と周囲を散々心配させた。

しかし常総市の先生方や地域の方のお世話になりながら二年。自宅に戻った私はどうやら随分成長したらしい。料理をつくる、部屋をきれいにする、自分で着る服を選んで買う、といった「生活の中の当たり前」ではあるが、正に自ら考え行動する、自主的な行動ができるようになってきた。

まもなく私も定年を迎えるが、今後は「生活をよりよくすること」を考え、主体的な行動ができる人間を目指したい。

蛇足ではあるが、本校の組織目標の一つも「主体性の育成」である。

今を大切に

かすみがうら・下稲吉中
福島　真

以前勤務した下稲吉中学校に今年の四月から再び勤務することになりました。当時保護者だった方々とも会う機会があり、懐かしく勤務しています。

勤務していた頃、当たり前に行っていた行事もコロナ禍の中で中止や延期・見直しが行われ、生徒たちにとってはつらい中学校生活でしたが、今年は三年ぶりに京都・奈良の修学旅行を行いました。さらに市・県南・県総合体育大会も実施され、以前

のような普通の学校生活が戻りつつあります。今までは当たり前にできていたことが、当たり前ではないんだということを痛感している現在です。だからこそ、生徒たちには、今できることを精一杯全力で取り組んでほしいと思っています。

まだコロナ禍ではありますが、生徒たちが安全・安心な学校生活が送れるために、どのようにすることが一番最善なのかを考え、学校経営を行っていこうと思っています。

聞くために

つくばみらい・谷原小　渡邉　清美

先日聞いた講話の中で、はっとしたことがあった。それは、「聞く」という行為には、人間性が大きく関わり、相手がどう捉えたかは、その本人にしか分からない。つまり、聞く側の価値観等により、こちらが意図したことが、伝わっていない可能性があるというのである。その言葉に「はっ」とした。「聞く」という行為は、どうあるべきなのか、自問自答する機会ともなった。

自分自身の「聞く」という行為を振り返ると、話し手の意図を正確に捉えなかったため、他者への伝達が正確にできなかったことがあった。自分の価値観だけで話を聞き、その言葉の裏にある、話し手の思いに気付けなかったのである。つまり、自分の捉え方の不備と人間性の未熟さにより起きてしまったことである。

私は「聞く」機会が多い。そして、話し手の意図を正確に捉える責任がある。私は、相手を思い、相手の思いを正確に理解して「聞く」事のできる人間性を養いたい。

大切なこと

下妻・高道祖小　野村　隆

教員であった父（もう亡くなっている）から、私が教員を目指そうとしたときに「先生は何より情熱が一番大切。子供のことを本気で考えてやれ。」と言われた。これは強烈に印象に残っている。「情熱さえあれば…。」と突っ走っていた。また、「全ての教育活動は子供たちのことを思ってやっている、忘れるな。」とも言われた。

父の時代からは学校教育を取り巻く環境は大きく変わり、ＩＣＴ機器の活用が広がり、正解を教えるだけならば、それらの機器でも充分である。

では、私たち教員の存在意味は何だろうか。課題解決の糸口を一緒に考えること、子供たち同士の学びをコーディネートすることだと思う。さらに、ＡＩには到底できないのが、様々な事情を抱える子供たちに限りない愛情を注ぐことだ。父の言葉は、連綿と私の中にある。

これからも何が大切か、しっかりと見極め、子供たちや先生方と歩んでいきたい。

川と共に

常総・鬼怒中　袖山　文広

朝の立哨。校舎を背に視線を上げると、遠くまで見渡せる田園が広がり、その中を気動車が「カタコト」と通り過ぎる。遥かに筑波山を望み深呼吸をすると清々しい。生徒が、「校長先生、おはようございます」と爽やかに自転車で通り過ぎる。

すばらしいこの地域だが、平成二七年九月、近くを流れる鬼怒川の堤防が決壊した。決壊場所は学区内。関東東北豪雨だ。市内で多くの家や学校等が、床上・床下の浸水となった。道路は寸断。電気や水が止まり、食料の確保も厳しい状況であった。あれから七年。決して、風化させてはならない出来事だ。

先日の中学生議会で、生徒会役員が、市長様や行政の方々に鬼怒川河川敷の有効利用について一般質問をした。被災をした子供たちが、川と共に生き、川を生かした常総市の発展を願っている。なんともたくましいではないか。生徒の成長を願い、職責を果たすべく、尽力したい。

ご逝去を悼む

令和四年七月十三日、かすみがうら市立霞ヶ浦北小学校長、根本重巳先生が逝去されました。

根本先生は、長い間、社会教育の立場から、学校教育に貢献されました。学校現場においては、子供たちと職員のことを最優先に考えた学校経営をされました。

ここに哀悼の意を表すとともに、謹んで根本先生のご冥福をお祈りいたします。

ご逝去を悼む

令和四年七月二十日、下妻市立大形小学校長、中嶋一雅先生が逝去されました。

中嶋先生は、いつも子供たちと部下を大切に思い、教育に情熱的に取り組んでこられました。

ここに哀悼の意を表すとともに、謹んで中嶋先生のご冥福をお祈りいたします。

編集後記

コロナ禍の終息を願いつつ、ウィズコロナの推進とポストコロナへの展望の中、各校とも様々な改革が図られております。

「梅のかおり」において、先輩校長先生方からたくさんの貴重な指針をいただき、掲載することができました。

第二五四号の発行にあたり、ご執筆いただきました皆様に感謝申し上げるとともに、会員の皆様のご健康とご活躍を祈念いたします。

（鈴木）